
リア充撲滅推奨騎士団

白河黒船

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リア充撲滅推奨騎士団

【Nコード】

N6365Z

【作者名】

白河黒船

【あらすじ】

学園とか青春とか、そういう楽しげで爽やかな耳触りのいい言葉は全て、基本的にリア充のためだけにある概念だ。リア充。リアルが充実している人間。与えられた結果としての充ちるのではない、充ちている者にこそ与えられるのだ。だから非リアに未来はない。得るべき勝利は盗まれ、持つべき幸福は奪われた。——だがそれでもいいのか？ いやよくない。これは非リアの非リアによる非リアのための、青春学園ストーリーである。というあらすじは全て嘘だ。（某携帯サイトで書いていた作品を改稿して転載しています）

俺は青春という言葉が嫌いだ。それはもう大っ嫌いである。

だって青い春だぜ？ もうバカじゃねえかと思う。

そんなものは所詮、幻想の産物であり、妄想の結晶でしかない。まったく唾棄すべき理想像だ。見据えるべき現実とは大いに関離れている。

部活に情熱を注ぎ、友情に汗を流し、恋愛に心を揺さぶられる——なんて、そんなステキな青春を過ごしている奴が、いつたいこの世に、どれほどいるというのだろう。

……そりゃ、いるのだろう。否定はしない。世界のどこかには、そんな愛すべき、素晴らしい青春を送っている輩が、そりゃどこかにはいるのだろうさ。

いわゆる、《リア充》と呼ばれる存在が。

リアル現実が充実している人間。

リア充。

そんな夢みたいない概念がしかし、本当にこの世に存在しているということを、残念なことに俺は知っている。

だが——、

この現実をリアル曇りなき眼で見定めるとき、そこには非リア充とでも呼ぶべき、どうにも救われない、惨めでか弱い人間もまた確かに存在していることを、我々は見逃してはならない。

青い春などとは到底呼べない。

灰色の冬——灰冬とでも呼ぶべき学生生活を過ごしている奴が、この世界には大勢いるのだ。

僻むしかない。

妬むしかない。

嘆くしかない。

呪うしかない。

そんなあまりにも醜悪で、矮小な精神しか持ち得ない人間が、この世には確かに存在する。

そう、たとえばこの俺もそうだ。

知力がない。——だから成績は常に並。

根性がない。——よって努力が最も苦手。

体力がない。——当然、部活には入らない。

性格が悪い。——そりゃ歪みもするだろうよ。

顔がよくない。——イケメンとか絶滅すればいい。

友達がいない。——よって社交性を磨く機会もない。

彼女がいない。——何その都市伝説、誰が信じるの？

これでどうやって青春を謳歌しろというのか。常識的に考えて不可能だろう。

こういう人間が、この世界には数えきれないほど存在しているはずだ。

いや、そうに違いない。俺だけのはずがないのだから。

むしろリア充のほうに稀少種だとすら思う。

……けれど。

そんな俺たちだからこそ、同じ思いを胸に抱いているはずだ。負け組の思いは常にひとつ。すなわち、

——リア充滅べ、爆発しろ。

「——小^こ坏^わ。おまえ、何言^いってんの？」

という心から白けた素の台詞が、我らが唾棄^{そんけい}すべき二年三組担任教師、宇塚桂^{うづかけい}による、俺の《リア充撲滅》という崇高なる野望への感想だった。

まったく救いようもなく陳腐な発言だ。これで現代文の教師だといふのだから、日本の教育に纏わる様々な問題の根深さが垣間見えてしまうというものだ。

この国の未来は暗い。

俺はやれやれと内心で溜息を零しつつも、一応は目上を立て、丁寧な態度でもって応対する。

「何言ってるも何もですね、宇塚先生。俺はされた質問に対して、答えを返したに過ぎません」

「今言った、僻み根性丸出しで醜い嫉妬心の吐露が、か？」

「……教師が生徒に言う台詞ですか、それ」

「生徒が教師に言う台詞じゃなかったらどう、そもそも」

頭痛を誤魔化すように首を振る宇塚。

この男、ここは職員室だというのに、恐ろしくダラけた格好で椅子に腰かけている。電車の中で周りに迷惑を掛けまくるアホな不良どもですら、ここまでルーズなポーズはとるまい。

対する俺は立ちっぱなしなので、いい加減お暇させてもらいたかった。

そもそも、放課後に教師に呼び出されなければならないような問題を、俺は起こした記憶がない。

そう伝えると、

「自覚がないのは恐ろしいな……」
などと言われてしまう。

「おまえ、いつも昼は独りだよな。休み時間にも会話に混ざってないし、ていうかなんか、《話しかけるなフィールド》を周りに形成して、孤独に読書してるよな」

「……意外とよく見てますね先生」

「『はい校長。私のクラスにいじめはありません。みんな明るくい子たちです』」

「眼がよくても脳がダメなんです先生」

「だったらおまえはいじめられてんの？」

「まさか」

あり得ない。心外極まりないね。遺憾の意を表明したい。

だが宇塚は動じた様子もなく、

「——そもそもおまえ、なんで呼ばれたかわかってんの？」

「いえ。正直全然」

「だろうな……」

息をつき、宇塚。

「いいか、小坏。先も言ったが、おまえには放課後、奉仕活動をしてもらう」

「だから、それはお断りしますと」

「だから、おまえに拒否権はないんだよ」

「……………」

横暴すぎる。

こんなことが許されていいのだろうか、いやよくない。反語。

「ていうか小坏、断るために長々と言いつけてたけどよ、要するに嫉妬だろ？」

「違います。俺は単に、リア充に対して奉仕などしたくないと言っているだけです。むしろリア充どもが俺に奉仕すべき、そうすべき」

「それを世間では嫉妬と言っ」

「ならば私は『shit』と言っ」

「おまえバカだろ」

スゲエこと言う教師だ。ちょっとしたジョークなのに。

このご時世にまあ、恐いもの知らずな公務員である。懲戒免職されてしまえ。

「そんなんだから友達いねえんだよ、おまえ」

「訴えますよマジ、教育委員会とかに」

「そんなんだから友達いねえんだよ、おまえ」

「このタイミングで重ねてきた!？」

「ともかく——」

と、宇塚が卓の上から、一枚の紙を俺に手に取る。

それをひらひらと靡かせながら、

「おまえは放課後の奉仕活動。これ決定事項だから」

「誰が決めたんですか」

「俺」

「でしようね。撤回してください」

「ダメだ。女子を泣かせたおまえが悪い」

「そついうの男女差別ですよ」

「うるせえな、なら言い換える。——クラスメイトの精神に甚大なる被害を与えたおまえが悪い」

「そこまで言いますか……」

これはもう覆せそうにない。

諦めて、俺はやれやれと肩を竦めた。

そもそも、どうして俺が放課後の職員室に呼ばれているのか。

その原因は、今日の昼休みにあった。

ある女子生徒が、俺の昼食である購買のパンを踏んづけやがったのだ。

教室から飛び出してきたその女子と、買った帰りを歩いていた俺とが接触し、その際に落としたからあげパン（百円）が犠牲になった、という流れである。

ともあれ、その程度のことですら簡単にキレてしまうほど、俺は現代っ子のマニユアル通りに動いてはいない。相手が謝れば、それで許す程度の寛容さならば持ち合わせがあった。

だから——問題はその先だ。

別に、その女子生徒が謝らなかつたのかといえば、そんなことはない。彼女はすぐに、俺へ謝罪の言葉を發した。俺もまた、特に大事にせず、笑つて流す心づもりであつた。

——そこからはよく覚えていない。

まず廊下の奥から、数人の女子生徒が群れてやつて來た。どうやら俺とぶつかった女子は、そいつらとの待ち合わせを急いでいたらしい。少し時間に遅れたようだ。

そこで誤解が起きた。

あとから來たその女子どもは、何を勘違いしたか、俺がその女子生徒に絡んでいると思つたらしい。

俺がそいつらに絡まれてしまった。

では、そいつらと口論になつたことが問題なのかといえ、それも違つ。

確かにちよつとした諍いにはなつた。

だが俺は冷静に対応したつもりだ。下手に熱くなつては勘違いを助長する。自分で言うのも何だが、俺は今世紀最高とすら言えるレベルの社交性を發揮した自信がある。

そこへまた別の生徒がやつてきたから話がややこしくなつたのだ。介入してきたのは、この二年三組の委員長だつた。すこぶる無駄に、まるで要らんほどの正義感に溢れている、というか溺れているような奴で、喧嘩している（ように傍からは見えた）クラスメイトを、放つておくことはできなかつたらしい。

もう少しで解けそうだつた誤解が、ここにきてまた振り出しに戻つてしまつた。

——そして。

この辺りで、俺の社交性に限界がきた。

だつて仕方ない。

普段、人と話すことなど滅多にないのだから。部屋の白い壁さんとか、クレーンで無駄に取ったイルカの佐太郎くん（命名・俺）くらいしか、俺には話し相手がいなかった。

言い訳させてもらえば、その時点で俺は、もういっぱいいっぱいだったのだ。舌の筋肉を数ヶ月分は使ったと思った。寝て起きたら舌が筋肉痛になってるんじゃないかとすら思った。

——そのせいだ。

「仲良くしようよ。ねっ？ 三組はみんな仲良しでしょ？」

という、委員長の一言に、俺が過剰に反応してしまったのは。

みんな仲良し？

ふざけるなよ。

友達なんて俺にはいない。

おまえには何も見えてない。

それで委員長など——嗤わせる。

そんな思いが、心の中でオーバーヒートしてしまった。
そして。

気づけば俺は、言葉の限りを尽くして『二年三組がいかにもダメなクラスか』を語り、同じくヒートアップしていた委員長の反論をことごとく論破し尽くし——

最後には、盛大に泣かせてしまっていた。

と、いうわけだ。

要するに不幸な事故だった。

「……うん。やはりどう考えても、俺が放課後に呼び出され、あま

つさえ罰則まで命じられる理由がわからないですね」

「ならば教えてやろう。——わからないのが問題なんだ」

「よしんば俺が悪いとしましょう。しかし、果たして俺だけの責任でしょうか？」

「ああ、明らかにおまえが一人だけ悪いな」

「なぜ」

「社交性が乏しすぎるからだ」

そんな殺生な。

しかし、その台詞には反論のしようもない。なぜなら事実だから。大人って卑怯だよな。

「まあ、そんなわけだから」

宇塚はあくまで事務的に、淡々とした口調で語る。

俺の悲嘆など微塵も顧みることがない。これだからこのダメ教師は。

「命じる。——二年三組男子四番、小坏継文^{つくみ}」

名を呼ばれる。

下の名前が嫌いなので、できれば呼ばないでほしいのだが。

「まあ仕方ない……、か」

「奉仕活動、無期限。頑張ってくれたまえ」

「わかりま——って無期限!? 一週間とかじゃなくて!？」

「んにゃ。俺がいいって言うまでだ」

「んなつ……、活動内容はっ？」

「俺の命令を聞くこと」

「体のいいパシリじゃねえか!」

俺は喚く。場所も弁えず——いやむしろ、他の教師の耳にも届くように。

こんな理不尽が罷り通つてなるものか!

……しかし、生憎と他の教師どもは、誰一人こちらへ振り向かない。

というか、明らかに視線を逸らされていた。

「くそつ、この事なかれ主義者どもめ……神は死んだのか」

「知らないのか？——教師は聖職者なんだぜ？」

「腐敗してる！ そりゃ神も死ぬよなあ——！」

「さて、——それじゃあ最初の仕事だが」

「すげえなスルースキル！ てか今日からのの！？」

「これを——」

と不条理なスルー挟みつつ手渡されたのは、一枚のプリントだった。

先程から宇塚が手に玩んでいたものだ。

「生徒会副会長に渡してきてくれ」

「副会長……、つて、どこの誰ですか？ 名前は？」

「……………」

宇塚が黙った。

俺はそこまでおかしいことを言っただろうか。

「……瀬恒だ。瀬恒九桐。同じクラスだろうが」

「ああ……、アレか」

「クラスメイトを『アレ』呼ばわりか」

「リア充なんて代名詞で十分です」

だって全員、敵だからな。

名前どころか、本当なら顔すら記憶から弾きたいくらいだ。

「おまえほんつと腐ってるよな、人として」

呆れた、と楷書で記されたような瞳をして、宇塚が宣う。

俺は肩を竦め、

「果たして俺が腐ってるのか、先生の目が腐ってるのか——どちらが正解でしょうね？」

「喧嘩売ってんのか貴様」

「いえ……？ なぜですか？」

「ああ、素なのか。それ素なのか小坏。マジで救いようねえな、おまえ」

「昏高一やる気がない教師と名高い宇塚先生が、俺を救おうだなんて考えてたんですか。……著しく、甚だしく意外ですね」

「あ？ 見る目ねえのな。おまえを公正させるために、わざわざ仕事を振ってやってるのがわからんとは」

「嘘つけよ……」

「なら仕方ない。これはもう仕事を増やすしか――」

「――不肖、小坏継文！ ただちに職務へ執りかけます！」

それではっ！

言い捨てるようにして、俺は職員室から飛び出した。

これ以上面倒を押しつけられてたまるか。

……やれやれ。

俺は廊下を進みつつ頭を抱えた。

まったくもって、面倒な役職を担わされてしまった。

今日から一人で事務仕事。

明日からはクラスで独り。

「……………」

いや、今までも独りだったけど。

独りは独りでも、それはただ地味で、普通で、しかし孤高であっただけだ。

だが今日、俺は明確に委員長を敵に回してしまった。

昨日までの「小坏？ ああ、いつも独りでメシ食ってる奴だっけ」という認識が、

今日からは「小坏！ ああ、委員長を泣かせた外道な野郎だろう」にワープ進化。

もうどうすりゃいいのかと。

つか高校生にもなって、どうしてこんなことで悩まなければならぬのか。

——正しい答えなんて、誰も教えてくれないのに。

さて。

職員室を飛び出した俺は、とりあえず生徒会室を目指した。生徒会役員なのだから生徒会室にいるだろう。でなければ知るかという話だ。

二階にある職員室から、すぐ目の前の階段を降り、すぐそこにある一階の生徒会室を目指す。

こんだけ近いんだから自分で行けよ宇塚、と思わなくもないが、仕事が楽な分には文句を言うことでもないだろう。

なにせ全てが宇塚の一存だ。

この昏咲くわいせき高校で《最もやる気がない教師》という称号は伊達じゃない。というか、そんなもの教師に付く称号ではないだろう。

宇塚は怠慢と墮落の申し子だ。何を命じられるか知れたものではない。

「……まあ、どうせいつも独りだから、暇なんだけどな」

言ってて悲しくなってきた。今視界に縄状の何かがあつたら、ノータイムで首に巻きかねない気分である。

——などと落ち込んでる間に到着した。

とはいえ、生徒会室になど来たことがない。目立つ場所（昇降口のすぐ近く）なので辛うじて場所は知っていたが、そもそも俺は、役員の顔など件のクラスメイトの奴しか知らなかった。生徒会長の名前すら覚えてない。

だって興味ないし。生徒会に選ばれるような奴あ、どうせ全員リア充に決まってるから。知らんけども。

黒々と濁る複雑な想いをどうにか心中で溶かしつつ、心底嫌々、俺は扉をノックする。

「どうぞ」

と、返答が耳に届く。

それに従い、俺はゆっくりと扉をスライドさせた。

部屋の中には、女生徒が一人いるのみだった。

見覚えのある顔。訪問の目的である、瀬恒九桐その人だ。

これは僥倖。探す手間が省けたというもの。

さらに、一度に大勢を相手にしなくて済むのもラッキーだ。一対一以上では上手く喋れない。

俺は小さく会釈をしながら——というより瀬恒をなるべく視界に入れないようにしながら——生徒会室へと立ち入った。

入った瞬間、もう顔を戻さざるを得ない。仕方なく正面を見据える。

学校の備品にしては錆のない綺麗なパイプ椅子に腰かけている瀬恒。烏の濡れ羽、とても表現すればいいのだろうか。特徴的な長い黒髪を優雅に靡かせ、仰ぐようにこちらへと振り返った。

気品のある挙動。艶のある白い肌はまるで作りものめいていて、女子の間で「芸術品みたい」だと呼ばれていることを俺は知っていた。それは最早、妬みや嫉みを通り越し、凡百にただ純粹な感動だけを抱かせる領域にあった。元より整った顔立ちも相俟って、いかにも良家の令嬢的な佇まい。あからさまに格の違う、オーラとでもいうべき独特の雰囲気、狭い室内に充満し始めていた。

まさにリア充。持てる者。

ほんともう、……椅子蹴飛ばして床に転がしたいくらいウゼえよね。

都合よく部屋がワックス塗りたてだったりしないかな。滑って尻を打撲すればいいのに。

「あれ……小坏くん？ どうしたの、何か用事？」

瀬恒が小首を傾げていた。癖み根性丸出しの、どうしようもない

俺の内心など露ほども悟っていないだろう、それはどこまでも無垢な、処女雪のような表情だった。

あとさつきからいろいろ褒めているが、この辺りは全てクラスの男子（が休み時間に交わす頭の悪い雑談）からの受け売りだ。無駄に詩人めいた表現がイラつく。

が、まあ、瀬恒九桐などというリア充と真ん中の存在よりはいくぶんマシだ。

俺からすれば瀬恒など、有象無象のリア充その１に過ぎない。ともあれ。

嫌な仕事は、早く終わらせてしまうに限る。

「えっと……、これ、宇塚先生から。渡してくれて頼まれて」
プリントを前に出しつつ言った。

喋るとなると途端に卑屈になるのだから、俺はもうマジで小市民というか、……小物だよ我ながら。

でも仕方ない。

美人やイケメンは、基本的にそれだけで怖いのだ俺は。

「そうなんだ！　ありがとね、小坏くん」

瀬恒は莞爾として笑む。

——瞬間。

なぜだろう。

その朗らかな微笑に、何か引つかかるモノを感じた——ような気がした。

……気のせいだろうか。

俺は一瞬だけ覚えた違和感を投げ捨て、

「いえいえ」

とだけ言う。

それよりも、俺なんかの名前を覚えていたんですね、瀬恒サン。サスガハフクカイチヨウサンハチガウナ！

心中で毒を精製しつつ、書類を手渡す。

「小坏くんが生徒会室に来るなんて珍しいから、ちょっと驚いちゃった」

「……そうですよねー……」

珍しいってか、初めてだしねー。

俺ほど生徒会室という空間が似合わない生徒もいませんよねー。でも恐らく最初で最後、もう金輪際来ませんから安心してくださいねー。

などと毒の貯蔵量を増やしていると、

「……、ん？」

と、プリントに目を通していた瀬恒の形のいい眉が、なぜか角度をキツくした。

何か妙なことが書いてあったのだろうか。

書かれている内容を俺は知らない。ただのペラ紙だったので、読もうとすればいくらでも中身を知ることにはできたのだが、しかし興味が絶無だった。盗み見ようだなんて考えは浮かびもしていない。

……まあ、とはいえ、俺が首を突っ込むことでもないだろう。

役目は果たした。それにもう、これ以上リア充と二人きりで密室に存在したくない。

「じゃ、確かに渡したから」

告げて、俺は退室しようと踵を返した。

そのときだった。

「え、ちょっと——どこ行くの？」

予想だにしない台詞で、俺は動きを妨げられた。

どこに行くか、だって……？

「職員室に戻って報告して、それからもう帰るけど？」

「……もしかして小坏くん、これ読んでない？」

「読んでない、です、けど……」

妙な威圧感に、なぜか敬語になってしまふ俺。

コミュニケーション障害が酷い。

だが現実には、突然の事態に混乱する俺への配慮を決定的に欠いている。

瀬恒はなぜか、渡したプリントを俺に突き返してきた。

「え……？」

「読んで」

「はい！」

咄嗟にいい返事をしてしまった。

瀬恒の、端的かつ有無を言わせぬ口調が恐ろしい。

同時に自分のコミュ障っぷりも怖かった。

仕方なしに紙を受け取り、

「……………」

目を通す。

内容には見覚えがあった。先月の、一学期中間テストの時間割表だ。

だがそれだけ。別段気にかかるような箇所は見当たらない。

……いや、違うか。

遅れて気づく。確かにおかしい。

こんなものを、いまさら届けさせる意味がないのだから。

なぜ宇塚はこんなものを配達させた。アレか、ここに実は、学園の暗部に繋がる暗号が秘められていてもいいのか。ってアホか俺は。

疑問に思いつつ、目線を下げる。

と——プリントの下部に、小さく文字が書き込まれていることに気がついた。印刷ではなく、ボールペンによる手書き文字。

暗号はないが、伝言は確かに書かれていたようだ。

曰く、

『小坏を任せる。例の件への材料として、まあ上手く使ってやって

くれ』

だとか。

……………いや、

「——はあっ!？」

驚きに、俺は大きく目を見開いた。

世界の全てを恨んでるかのように細くて危ないと評判の俺の目蓋が、今はほとんど円形に近づいているはずだ。それくらいにもう、瞠りに瞠った。

ていうか、例の件？ 例の件って何だよ。

リア充と関わらなきゃいけないなんて聞いてない。これは罠だ。俺は陥れられた。

「……………何、これ…………？」

「私も聞いてないけど。その分だと、小坏くん本人にも意味がわかってないみたいね」

瀬恒が反応する。

いや、別に訊ねたわけじゃなく、単に疑問が口をついて出ただけなのだが。

それはともかく。

「任せるて。使えって…………」

意味がわからない。

わからない、が、とにかく面倒なことになりそうだという予感だけは強く覚えた。

「……………」

驚愕のまま、俺は何となし、瀬恒の顔を見遣った。

俺に見据えられた瀬恒は、しかし動じることもなく肩を竦める。そして一言。

「とりあえず、座る？」

とだけ訊ねてきた。

それは疑問の体を取った命令であり、俺は逆らうこともできず、唯々諸々と目の前のパイプ椅子に腰掛ける他なかった。

どうしてこうなった。

あえて二度言おう。

——どうしてこうなった！

椅子の上の俺。

はつきり言って超アウエー状態である。部屋は小さく、肩身は狭く、俺はただ萎縮したまま小さく縮こまって、時計の針に「もっと機敏な動きを見せる！」と檄を飛ばしていた。心の中だけで。

むしろ俺が応援してもらいたい気分だ。

なんだ、この状況。

なぜ俺が見ず知らずの（いや一応クラスメイトだけど）リア充と、こんなに長い時間、同じ空気を吸って過ごさなければならぬのだ。普段、教室という小空間を共有しているのはワケが違う。

というか普段は共有などしていない。教室という名の社会の縮図、その内部に俺の居場所などあった試しがない。

たとえば諸君、仲のいい友人と教室でつるむに当たって、その近辺の座席を我が物顔で占有した経験はないだろうか。

言いわけとしては、「ちょっと借りているだけ」「言ってくれればすぐ空ける」「そもそも学校の机は公共物だろう」などが挙げられるか。

バカ言うな碎ける。

三番目の理屈は論外としても、ちょっと借りるのその「ちょっと」が、された側の人間からすれば言語道断でしかない。何がちょっとだ。何を指してちよつとという言葉を使用しているんだ。定義を話してみろよホラ。

親しい間柄ならばまだいいだろう。だが俺とおまえはそんなに親

しくないだろう、わかってるのか、お前に言っただよ鈴木。おまえいつから俺の友達になったんだ。その理屈が通るなら、俺が勝手におまえの筆箱から消しゴム取り出して、「あ、ちょっと借りてるぜ」が通るんじゃないの？ そんなこと俺がしてみろ、瞬く間に吊し上げを喰らうわ。恐らく翌日から、俺の財布がちよつと借りられるね。

で——なんだっけ。

言ってくれば、だっけ？

言えねえよ。それが言えたら苦労しねえよ。それが言えねえから友達がいねえんだよ。それぐらいわかれ。

友人の数がリアルにゼロ人なんだよ。本当に一人もないんだよ。わかってんの？

僕は友達がない、だよ。

残念系ライトノベルの主人公だつて真っ青の孤独っぷりだぜ、ざまあみろ。

だからもし椅子が占拠されていたとき、俺の対応はこうなる。つまり、

教室に入る

←

座席視認

←

アウト確認

←

そのまま何でもないように教室を縦断

←

入ってきたのとは別の出口から出ていく。

終了だ、恐れ入ったか。

俺は泣き入りそうだ。泣き寝入ってる現状を泣き入りそうだよ。

誰に？ って話だよ。

担任か？ 校長か？ それともPTAか、はたまた教育委員会？

あるいは文部科学省？

なんならアレか。神か仏にでも頼んでこいつてか。

誰も救っちゃくれねーよ。

救われたいとも思ってたねーし。

これで自分が“クラスの一員”だなどと、どうして考えられるだろう？

「……………」

以上。

五分が経過いたしました、一向に状況は改善されません、まる。

……もう、どうしよう。

ルサンチマンを醜悪に発露するのもそろそろ飽きた。この手の妄想は、繰り返しすぎて既に時間潰しとしての効力を見出せない。そもそも俺に露悪趣味はない。

改めて、俺は現状に思考を馳せる。さすがにこれ以上、下らない現実逃避もしていられない。

現在時刻、午後六時二十分。

現在位置、生徒会室。

現在状況——密室で女子と二人きり。

結論↓死にたい。

終わりだよバカヤロウ。

「……………」

ちら、と俺は同室にいるもう一人の人間へと視線を遣る。

瀬恒九桐。

昏咲高校生徒会副会長にして、二年三組女傑三人衆の一角。

……なんだろうね、その馬鹿げた肩書き。

瀬恒は先程から一切口を開くことなく、何やら難しい顔をして座り込んでいる。

正直、空気が重い。会話している間は一刻も早くそれを切り上げたかったが、こうなるとむしろ、何か喋っていてくれたほうがマシに思える。ちくしょう、こいつリア充だろ。リア充はくっちゃべってるのが仕事みたいなものじゃないのか(?)。

「……………瀬恒、九桐……………ね」

呟く。クラスメイトとすら大半は没交渉を貫いている俺だが、さすがにこの名前だけは、記憶しないほうが難しかった。

なにせコイツは——化物だ。

頭脳よし、運動よし、器量よし、性格よし。

三高ならぬ四高の女子高生。

勉強でも運動でも常にヒーロー、数えきれない数の友達がいて、居場所はいつでも人の輪の中心。

まさにリア充。これ以上なきリア充。

我らが——いや、俺はその“我ら”に入っていないので、実質は“彼らが”“彼女らが”というべきだろうが——二年三組の、まさにトップオブトップ、セクターオブセクターといった存在である。

俺なんかとは本来、完全なる対極に位置している人間だ。

弱点なんて——そう。

せいぜい、胸部が若干、貧相だということくらいしか——

「——小坏くん？」

名を呼ばれた。

「うえうえうえいつ!？」

瞬間、常軌を逸したリアクションを取ってしまう俺^{バカ}。

「えっ……?」

「ああ、うん、えっと、……なんでせうか？」

「今、私の名前呼ばなかった？」

「え——呼ん、」だ、ね。呼んだ。「はい、確かに呼びました」
そっぴいえは呟いてた。どうやら聞かれていたらしい。

いや、それならいいんだ。

てつきり心の声を聞かれたかと思った。めっちゃ焦った。

中学生のとき、朝学校に来てすぐ眠って、起きたら放課後だった
とき以来の焦燥を感じた。

……あの日、体育もあつたんだぜ……?

教師にすら起こされないって、俺もうどうしたらいいんだよ……。

「……小坏くん？」

「え、あ——ごめん」

ちよつとトリップしてた。俺の必殺技なんだよね。

その名も《エターナル・セルフ・バッド・トリップ永続的自虐思考悪循環》。

効果——自分は死ぬ。

恥辱に悶死し、屈辱に憤死する。

ハイ、E・S・B・T! E・S・B・T! ってな!

……ホントもう殺せよ神様、俺を。

「で、えっと……何だっけ？」

「や、何だっけて。小坏くんから話しかけてきたんじゃない」

「あ——……」

そっぴいなんだけれども。

別に話しかけたわけではなくてですね。

「……えー」

咄嗟のアドリブが効かない。

コミュ障のコミュ障たる所以である。

「あはは、へんな小坏くんっ！」

そんな無様を見て、瀬恒はしかし、さもおかしそうに笑みを零した。

……なんて奴だ。リア充とは思えん。

そこは普通、「うつわー、小坏、マジキモいんですけどー」と嘲笑うところだろう。笑うのではなく嗤うところではなからうか。俺の経験ではそのパターンだった。

それが聞いたか、「へんな小坏くんっ！」だってよ、おい。

ぶつちやけ変なのは貴様もだと思えますよ？

……などと言うわけにもいかず、

「あ、えつと……そう、あの紙に書いてあったこと、意味、わかる？」

お茶を濁した、というか本題に入った。

「あー、あれねー。意味わかんないよねー」

「あー、そうだな。うん。確かにわからない」

「本当に」

くすり、

嫣然と微笑を湛える

「……何考えてるんだろうなあ、宇塚せんせい……」

わからないなあ。

どうしてかなあ。

ふふふふふふ。

笑む瀬恒。

……なんだろう。

どうも俺と、ニュアンスが異なっている気がするのだが……。

「まあ、先生はもうすぐここへ来る手筈になってるから」

「え、そうなのか？」

「うん。だから、そしたら確認すればいいよ」

あの野郎、来る予定あったのかよ。

ならなぜ俺を使いに出した。まったくもって意図が読めない。

……ていうか俺、宇塚が来るまで帰宅不能？

「……く」

早く来い頼む……っ！

「——ねえ、小坏くん」と。

瀬恒がこちらへ向き直る。

「えっと、……何？」

普段から他人とのコミュニケーションが不足しているからだろう。

このとき、俺は気付いていなかった。

——瀬恒の声の質が、先までとは決定的に変質しているという事実に。

まあ、もつとも。

仮に気付いていたからといって、それでこの後の展開が変わっていたかといえば、きっとそんなことはないと思うのだが。

それはともかくとして。

瀬恒は、俺へと問いを投げた。

「どうして今日、楯本さんを泣かせたの？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6365z/>

リア充撲滅推奨騎士団

2011年12月21日19時50分発行